

縄文土器文様にみる物語の世界

山梨県埋蔵文化財センター 今福利恵

1) 縄文土器の時代

縄文時代はいまから約15,000年前に始まり、一万年以上の長きにわたり続きました。古いほうから草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と6期に区分されます。このあいだにつくられた土器は形や文様が時期と地域によって同じ特徴になり、その特徴によって名前が付けられます。五領ヶ台式・勝坂式・加曽利E式と名付けられた土器が関東地方の縄文中期では知られています。特に勝坂式土器は、中期中ころの関東西部から中部高地にかけて広がっており、特徴として人物や動物の文様が隠し絵のようにちりばめられています。土器の文様に物語りとして人物と動物がかかわりあったようすがみてとれます。その時代に生きた彼らの精神世界の一端をのぞかせた土器です。

2) 土器に文様をつける

土器は粘土のヒモを積み上げてかたちつくるもので、その造形はやり直しや修正が簡単にできます。文様のつけ方には器面を押してへこませる方法と貼りつけるやり方の二通りあります。へこませる文様には、撚り紐をおしつけて回転させる縄文やヘラを引きずって線をひく竹管文などがあります。縄文はその撚り方で多様な文様効果が表れます。ヘラは引きずる方向や角度でさまざまな印刻や線を表現することができます。貼りつける文様には、粘土紐で盛りあがった線とする隆起線文、そして立体的な突起や把手があります。

3) 文様を割り付ける ―文様のレイアウト―

縄文土器を観察すると、上段、中段、下段というように土器の文様範囲が横方向に分れていて、各段に同じような文様が繰り返かえされています。文様が描かれる範囲を文様帯といい、土器の縁から底にむかって2～3段くらいたてに重なっています。文様帯には器面を一周するあいだに小さな文様が繰り返し並びます。繰り返す文様は2つであったり、4つ、6つであったりと単位性があります。この小さな文様を単位文様といいます。単位文様は文様モチーフを隆線で描いてそのあいだを沈線など違う技法で装飾します。つまり隆線は文様意匠の骨格となる主文様として、それを飾っている沈線を従文様として区別できます。さらに繰り返される主文様の一つを大きくすることで土器に正面観が生まれ、すると左右と背面が決まります。主文様には配置してよい場所が決まっています。上段の文様と下段の文様は違っています。いくつかの変形もありますが、この配置はかなり厳密に守られているのです。文様配置が共通するということは、そこに暮らすみんながルールをわかっていることになります。ルールを順守しながら土器に人物や動物文様を配置しているのは、みんなの知っている物語りがその社会にあるものといえます。

4) 土器文様の物語性

土器の文様は多様な曲線、渦巻文、円文、波状文などから構成されています。勝坂式土器には、こうした文様のカタチにしたがって人の顔や人物、そして抽象化されたイノシシやヘビなどの動物が表現されます。すぐに人や動物とわかるものから、その一部を省略・変形して象徴的に描かれたわかりにくいものもあります。江上波夫先生は、「その意匠は、単独に、他と無関係に創造されたというより、彫塑的、直・曲線的な装飾意匠によって暗示され、触発されたと見得る場合が多い(1964)」と、もともとある文様のカタチを利用して表現しているとみなしました。小林達雄先生は「物語性文様の確立は、カタチに先行して存在する特定の意味＝概念があつて、それが特定のカタチに具現される(1986)」と考えています。

動物とわかる文様はイノシシ、ヘビ、カエルがあります。イノシシは立体的に表現されることが多く、頭部と胴部が一体化して平らな鼻が特徴となります。たてがみと耳が描かれませんが手足は表現されません。ヘビは、頭が三角形で胴体が太く尻尾が細く描かれ、有毒のマムシと思われます。土器の文様と一体化していることも多く、口を開けながら這い回ったり、とぐろを巻いたりといういろいろな形に表現されます。サンショウウオ状文とよばれる文様も、おそらくはヘビでしょう。カエルは丸い胴体に手足が表現されますが、頭がありません。

動物モチーフはその種類だけが土器文様となっていますが、ときには土器の縁で向き合っていることがあります。イノシシとヘビがにらみ合っている、ヘビとカエルが交互に並ぶなど二種類の動物文様が対立した関係にあります。その一方でイノシシの胴体がヘビになっているもの、ヘビに食べられるカエルなど、それぞれ二者がいっしょになっているものもあります。ヘビ、イノシシ、カエルはそれぞれ違う生き物で敵対しますが、ときには一体化するということがあるのです。対立と融合です。また土偶や顔面把手など人物の髪型にヘビやイノシシが表現されることもあります。動物と人がいっしょになっている、もしくは動物が擬人化されているのでしょう。動物三者の関係は、それぞれの大きさ、誕生、成長、生態、動作、活動時期など多くの差があります。縄文社会における人々の生死や成長、誕生そして集団の成り立ちや起源などをこうした動物に例えた物語りによって説明、理解し、それを土器に表現しているのかもしれない。

人物は線画で表現されることもあり、男女四人が並び向かい合ったりします。まるで踊っているかのような文様は、物語りのワンシーンのようです。線画でなく土偶が土器の文様となり、正面を向いた全身像が土器の胴部に表現されることもあります。また土偶が内側を向いて土器に抱き着いているのは顔が土器の縁に付くので顔面把手土器とよべれます。いずれも土器と土偶がいっしょになっています。土偶付きの土器で煮炊きされた料理は、食べ物の起源が女性の体内にあるという日本神話のオオゲツヒメの物語を彷彿とさせます。土器の胴部に顔が表現されることがあり、これは土器そのものを母体とみなして子供が生まれる瞬間をあらわしているのでしょう。土偶という神聖な祈りと日常の煮炊きが土器としていっしょになっているのです。このように土器の文様や使い方を通じて縄文時代に生きた人々の世界観を少しずつ読み解いていくことができます。

瓦の文様を考える

元国士舘大学教授 須田 勉

はじめに

我が国にはじめて瓦が伝えられたのは、崇峻天皇元年（588）のことである。この年、百濟から寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工が渡来したが、彼らの初仕事は、飛鳥の地に蘇我氏の氏寺、飛鳥寺（法興寺）を造営することであった。

その時に使用された瓦当文様は、まさに百濟から直輸入の蓮華文で、『日本書紀』の記述を裏付ける。その後、仏教の普及にともなう寺院建築の急速な広がりや、役所・貴族の邸宅の屋根にも瓦が使用されたことから、列島規模で屋根瓦が拡大した。

瓦当文様には、植物文・動物文・器物文などを図案化した具象文と円文・三角文・菱形文・渦文などの幾何学文などがある。朝鮮半島の影響を強く受けて成立した古代日本の瓦当文様は、軒丸瓦・軒平瓦とも植物文が圧倒的に多い。中でも軒丸瓦の蓮華文と軒平瓦の唐草文が主流を占め、やがて仏教の日本化とともに瓦当文様も日本的に変化する。

平安時代後期になると、軒丸瓦に巴文、軒平瓦に剣先文などが登場し中世を通して盛行する。城郭建築を瓦葺建物にした最初の人物は織田信長であるが、瓦当文様に家紋を使用したのは、豊臣秀吉以降のことだ。しかし、あれほど古代の宮殿や役所の屋根を飾った蓮華文や唐草文の瓦は、寺院以外では使われなくなった。ここでは、古代日本の瓦当文様の系譜や特徴などについて考えてみたい。

1 中国・朝鮮半島の軒丸瓦の瓦当文様

(1) 中国の初期瓦

日本の瓦づくりは朝鮮半島から伝わったが、おおもとは中国にある。中国では、西周時代(前 11~前 8 世紀)に出現したといわれる。西周中期には、丸瓦と平瓦を組み合わせるようになり、戦国時代(前 402~前 221)に盛行した半瓦当もすでに西周後期には生まれたといわれる(図 1-A)。

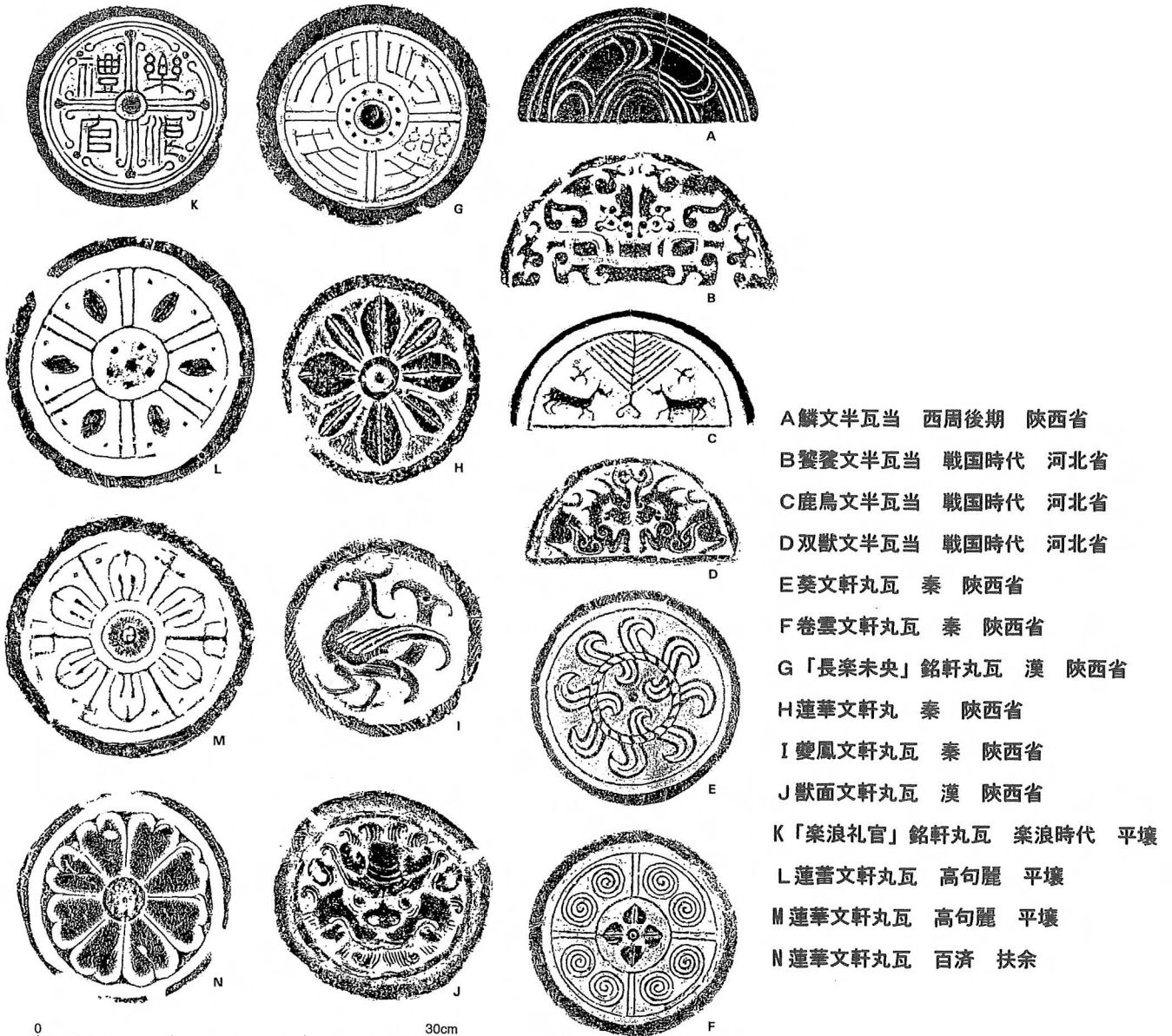
戦国時代の半瓦当には、饕餮文のような中国の伝統的な文様(図 1-B) 以外に樹木の両側に動物を配した文様(図 1-C・D) など、西方との関連をうかがわせる文様も使われた。中国全土を統一した秦・漢時代(前 3 世紀半~後 2 世紀前半)に、円瓦当(軒丸瓦)が一般的

になり、蕨手文(図1-E・F)、動物文(図1-I・J)、役所名や吉祥句(図1-G・K)を配した文様が主流を占めるようになる。

(2) 蓮華文軒丸瓦

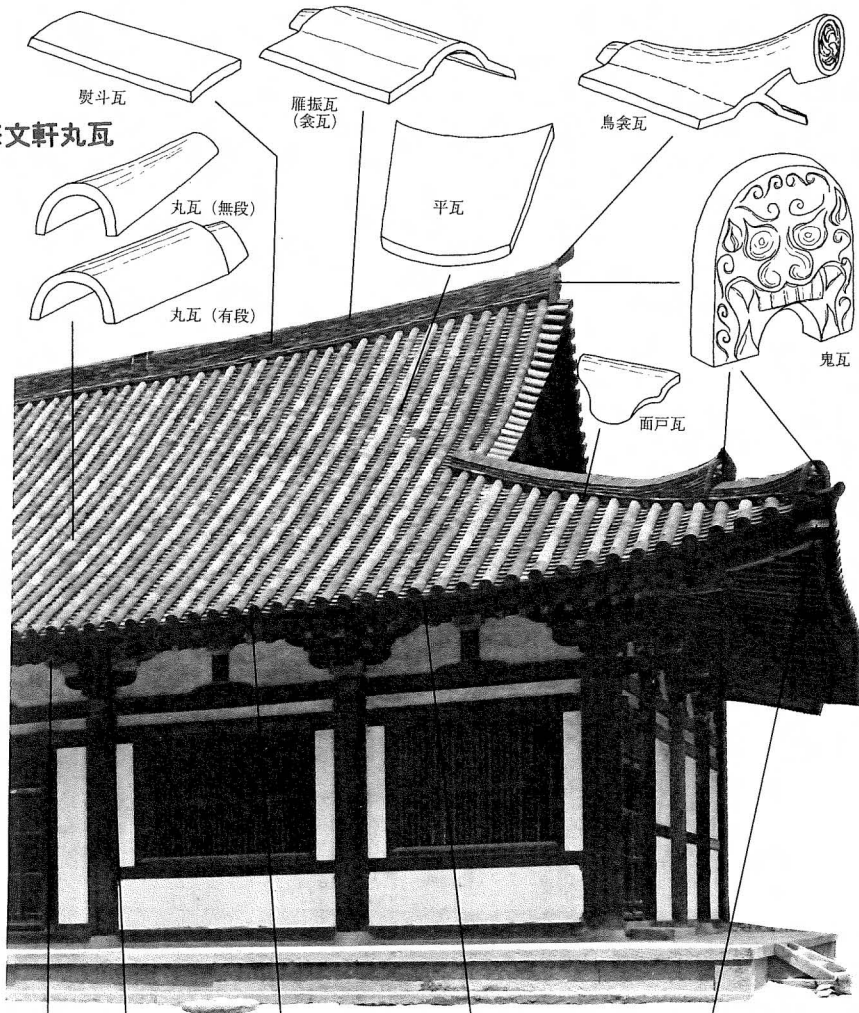
古代(7~11世紀)日本の軒丸瓦の文様は、蓮華文が一般的だが、中国では、秦代(前221~前207)に蓮華文軒丸瓦が存在する(図1-H)。中国では、蓮の花は天の中心や光明・水を象徴したという。しかし、蓮華文軒丸瓦は秦・漢時代にはさほど流行せず、仏教が盛隆した六朝時代に一般化する。仏教でも蓮の花は泥水のなかから生まれても正常さを保つことなどから、光明の根源とし重要視された。

三国時代(4~7世紀)の朝鮮半島では、墳墓・王宮・寺院などで蓮華文軒丸瓦採用された。特に、高句麗では北魏などの影響を受け、独特の蓮蕾文軒丸瓦が発展した(図1-L)。百済では、当初は高句麗の影響を受けたが、5世紀末以降、南朝の影響を受けて、独自の蓮華文軒丸瓦が発展する(図1-N)。日本の軒丸瓦は、主にその百済の影響下で生まれた。

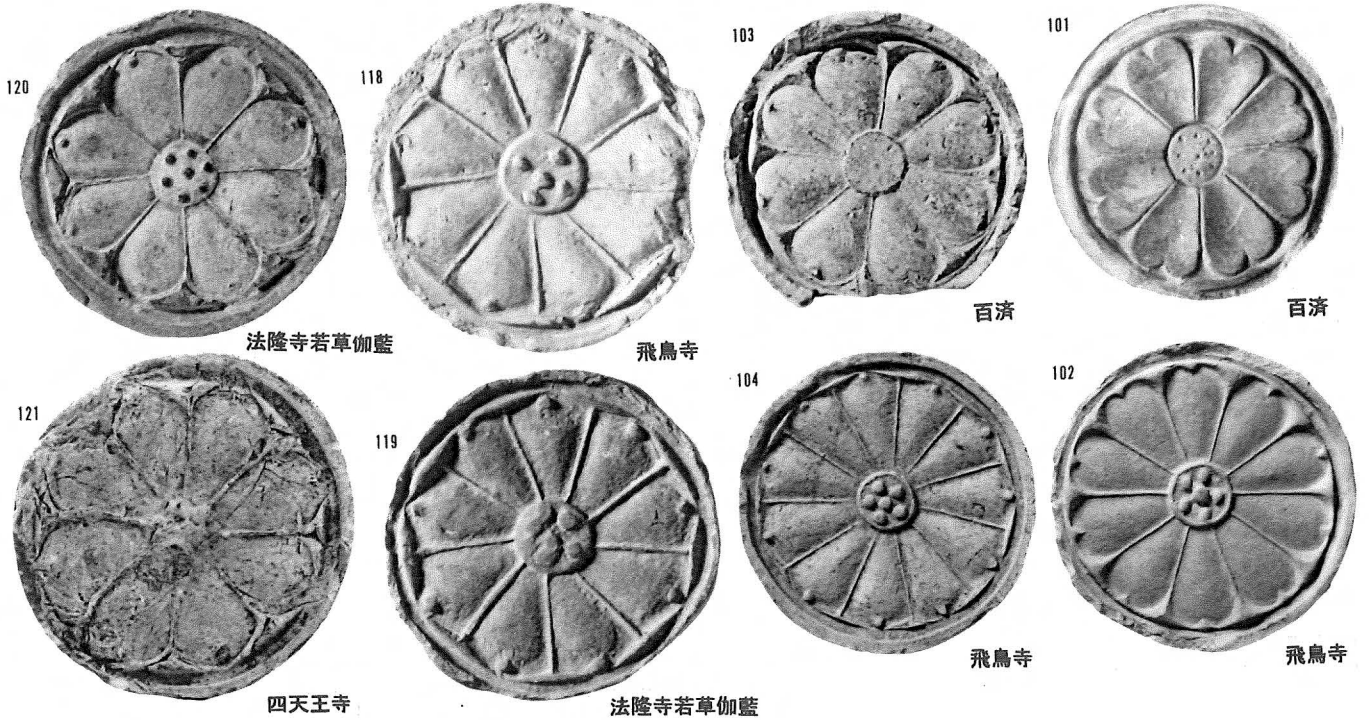
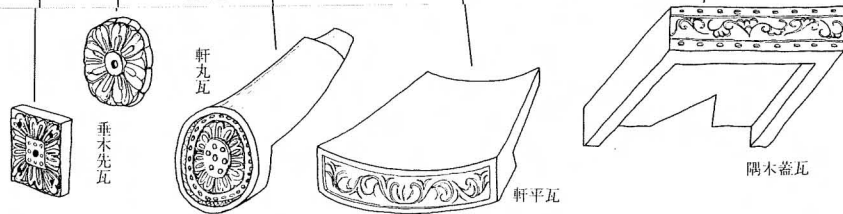


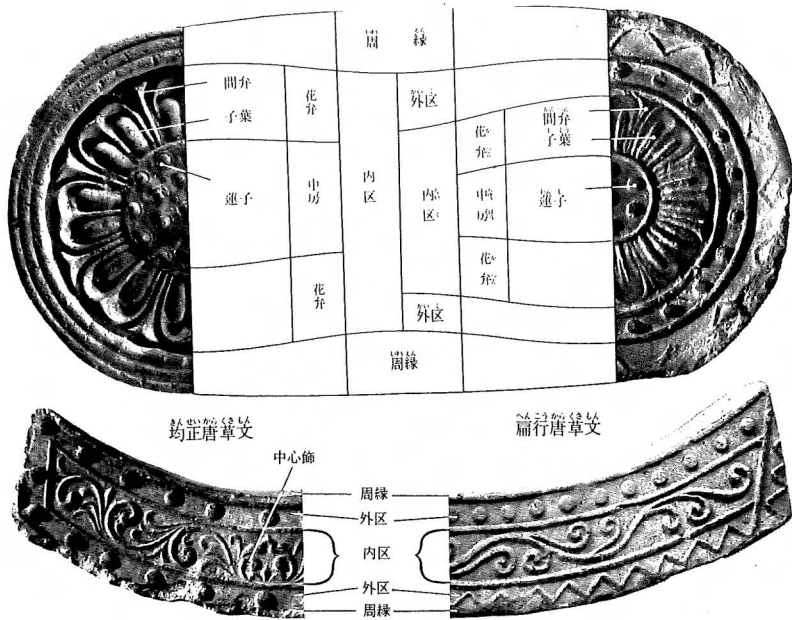
2 屋根瓦・瓦各部の名称と蓮華文軒丸瓦

(1) 屋根瓦各部の名称



(4) 同範瓦と年代差

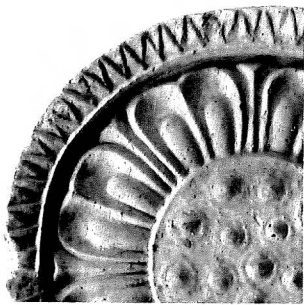




(2) 軒丸瓦・軒平瓦各部の名称



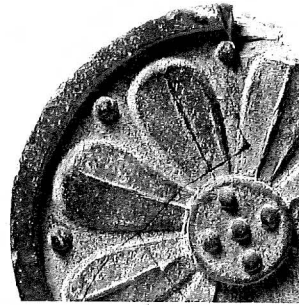
黄金瑠璃細背十二稜鏡(正倉院)



川原寺



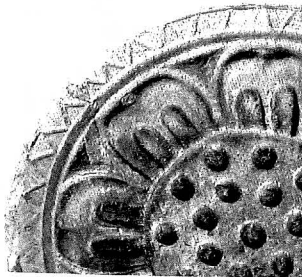
坂田寺



平吉遺跡



飛鳥寺



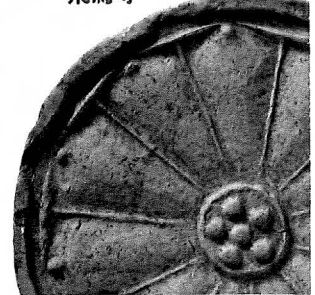
法隆寺



山田寺



雫上り瓦窯



飛鳥寺

(3) 蓮華文の種類



下総国分寺



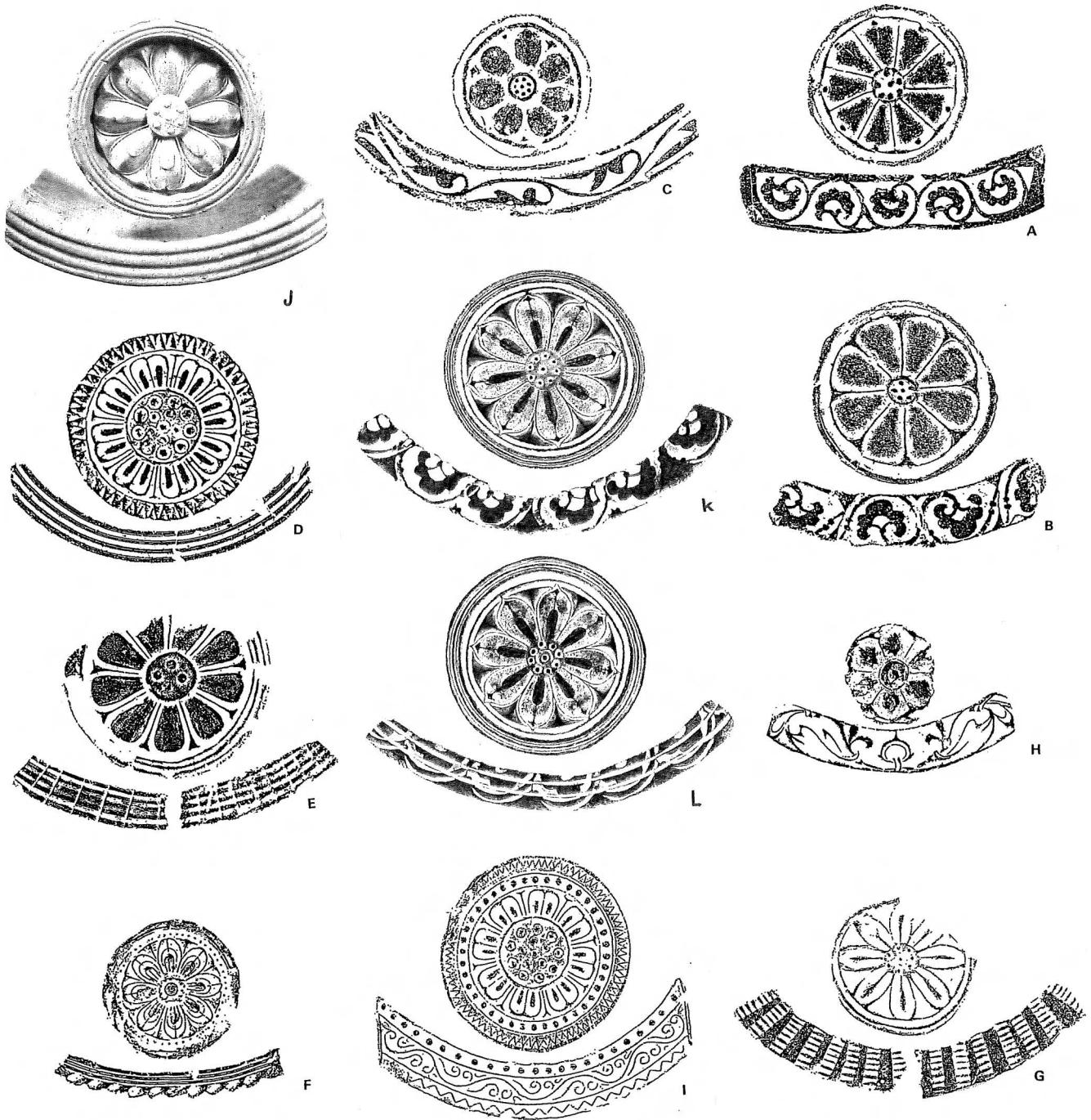
相模国分寺



上野国分寺

(5) 同一時期の同系瓦

3軒平瓦の文様



A・B 奈良・法隆寺若草伽藍 C 奈良・坂田寺 D 奈良・川原寺 E 愛知・尾張元興寺
 F 滋賀・輕野庵寺 G 愛知・山ノ入遺跡 H 奈良・斑鳩宮 I 奈良・本業師寺
 J 奈良・山田寺 k 奈良・百濟大寺 L 同・百濟大寺

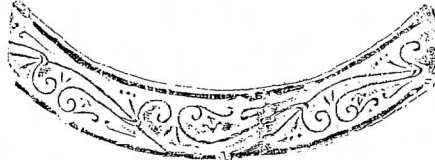
4 仏像・仏具の文様と瓦当文様



蓮華文磚 (百濟・武寧王陵)



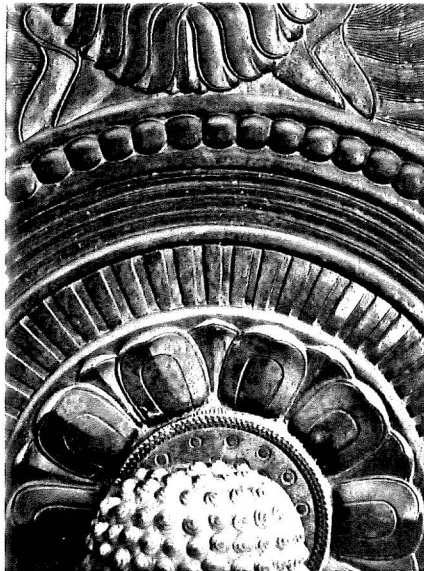
観世音寺鐘の上帯・下帯の唐草文



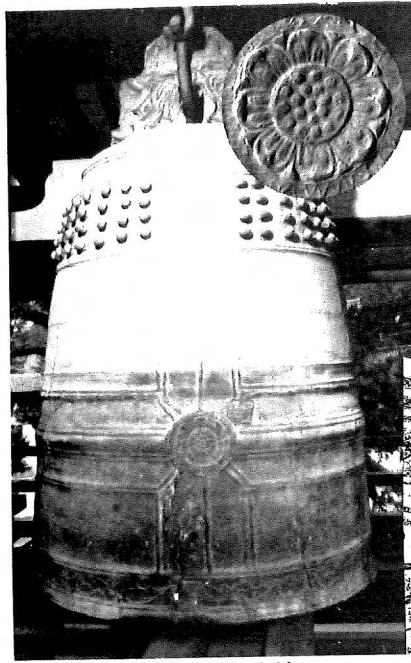
偏行唐草文軒平瓦 (観世音寺)



筑紫観世音寺鐘



釈迦三尊光背 (法隆寺西院)



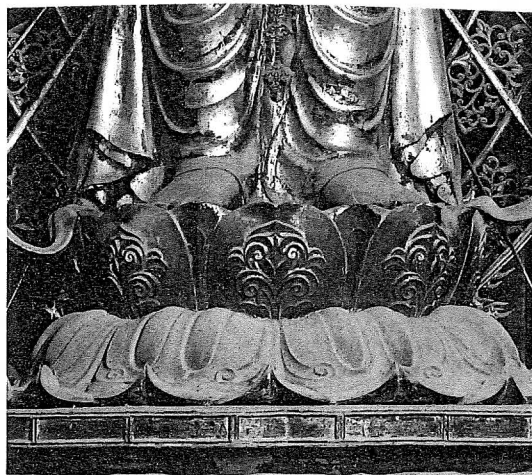
法隆寺西院鐘



法隆寺西院軒瓦



同鐘の上帯・下帯



不空羼索観音の台座 (東大寺法華堂)

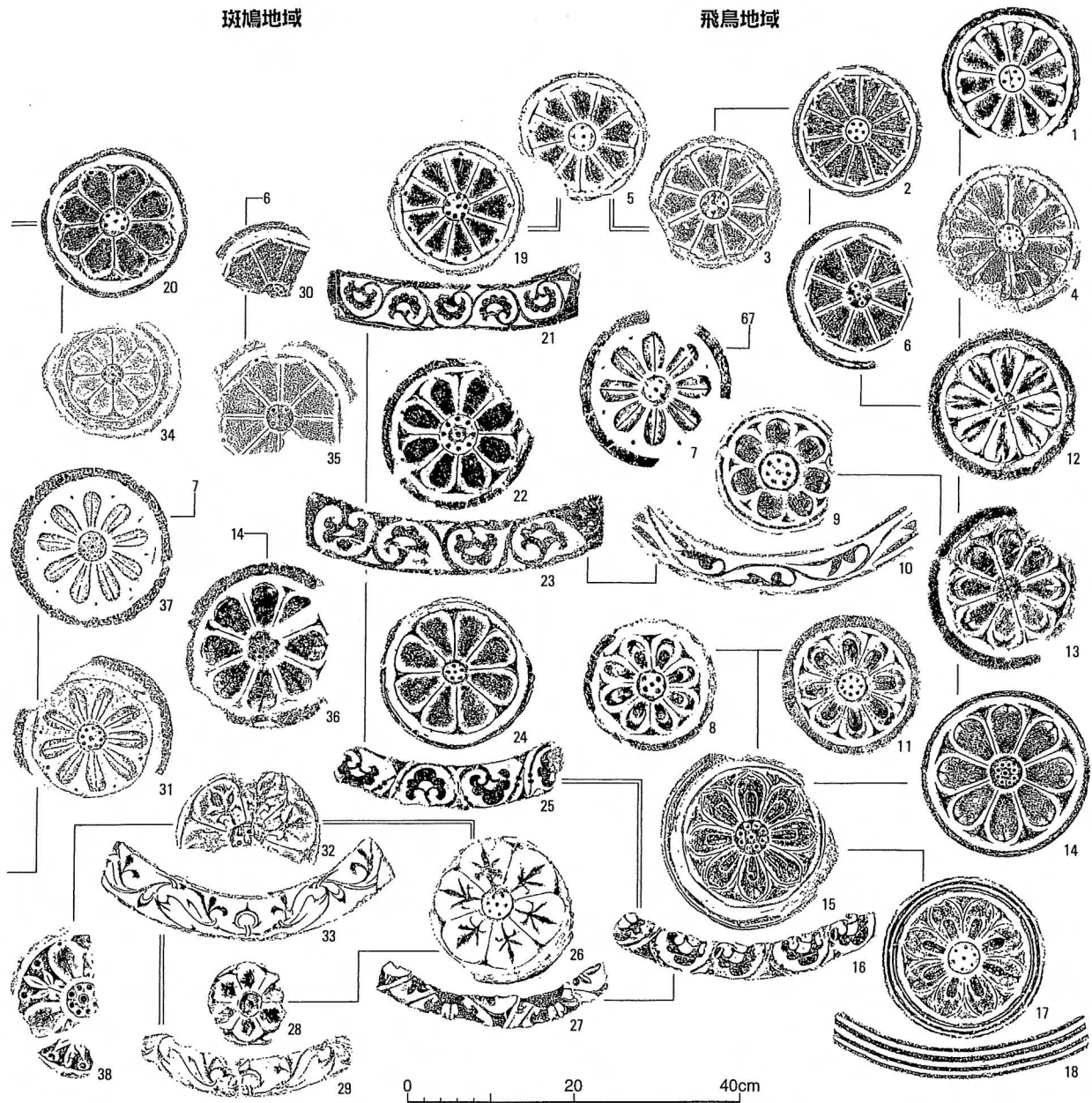


東大寺創建軒瓦

5 近畿地方の初期軒丸瓦・軒平瓦の系譜

(1) 飛鳥瓦の系譜

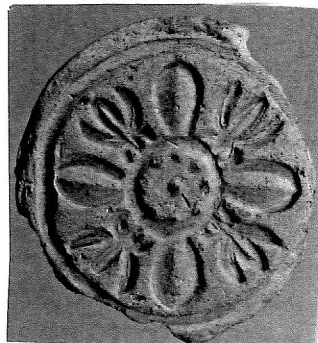
6世紀末の飛鳥寺造営を契機に、近畿各地で寺が建立される。当初は、大和の飛鳥を中心に同範・同文瓦が拡散するが、やがて斑鳩をはじめ、近畿各地で独自の文様も形成された。少数の瓦工が始めた瓦生産が、新たな渡来人や須恵器工人をまきこんで拡大定着する。



1~4 飛鳥寺 明日香村、5 上増遺跡 御所市、6~8 奥山麿寺 明日香村、9~11 坂田寺 明日香村、
 12・13 軽寺 橿原市、14 豊浦寺 明日香村、15・16 木之元麿寺 橿原市、17・18 山田寺 桜
 井市、19~27 法隆寺若草伽藍 斑鳩町、28・29 斑鳩宮 斑鳩町、30~33 中宮寺 斑鳩町、
 34・35 法起寺 斑鳩町、36 法輪寺 斑鳩町、37 平隆寺 平群町、西安寺 王子町



相模・宗元寺

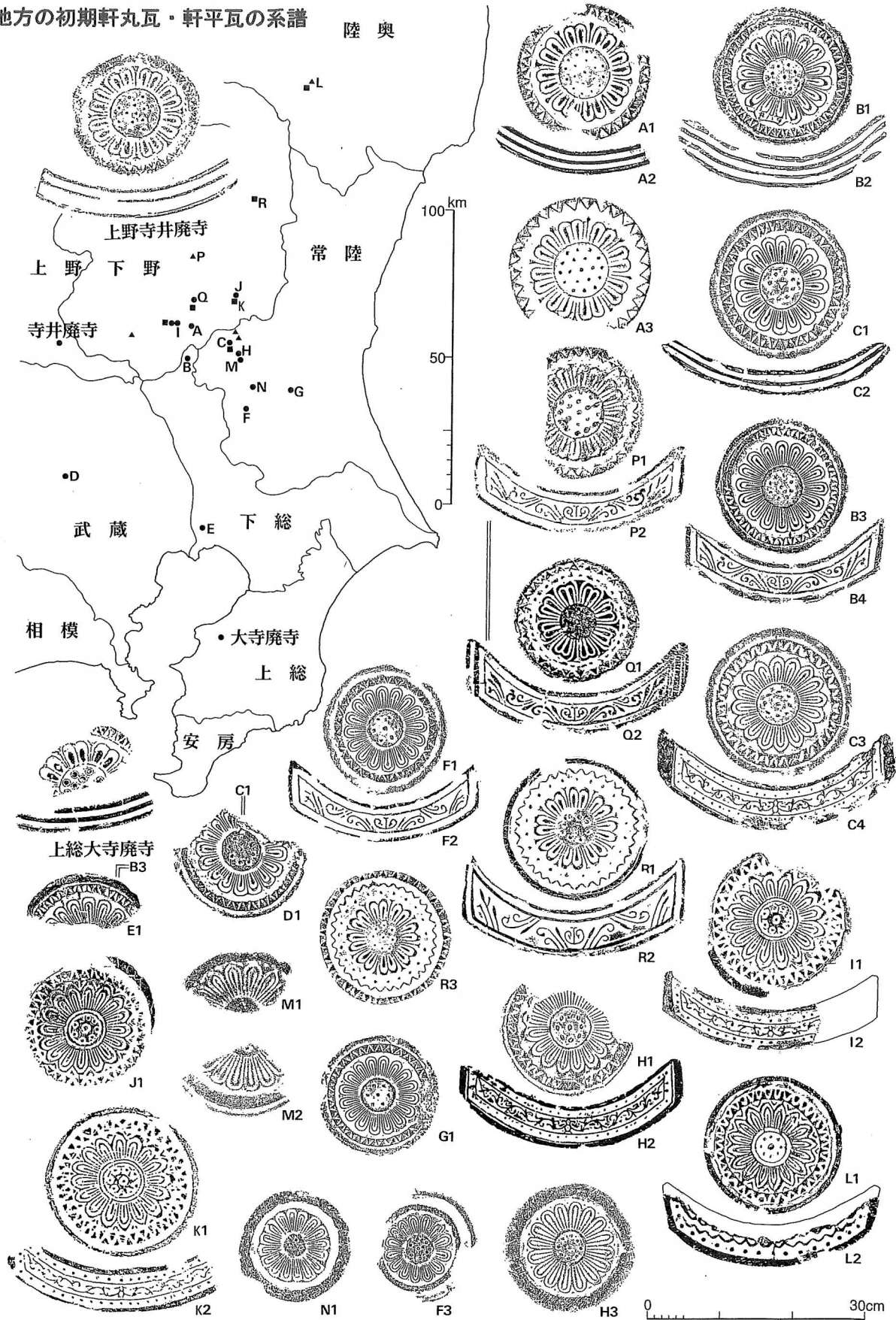


7



高句麗・平壤

6 関東地方の初期軒丸瓦・軒平瓦の系譜 陸奥



A 下野薬師寺 下野市、B 結城廃寺 結城市、C 新治廃寺 筑西市、D 女影廃寺 日高市、E 下総国分寺 市川市、F 東岡
 廃寺 つくば市、G 茨城廃寺 石岡市、H 下谷貝廃寺 真壁町、I 下野国分尼寺 下野市、J 大内廃寺 真岡市、k 井頭
 遺跡 真岡市、L 関和久遺跡 白河市、M 源法寺廃寺 真壁町、N つくば市、P 水道山瓦窯 宇都宮市、Q 上神主遺跡 上
 三川町、R 那須官衙 那珂川町